

■ 目 次	ページ
シンポジウム (XR 技術を活用したデジタルエリアマネジメント —広島市都心部の未来を創造する—)	2
第1回都市計画サロン (都市のコバコ 都市機能むかし話)	3
第2・3回都市計画サロン (中国支部都市計画系研究室公開研究交流会)	5
第4回都市計画サロン (Peter Nijkamp 氏 講演会)	6
2023 年度支部地域活動助成事業 (四国のまちづくりに関する情報交換会&見学会 in TADOTSU)	7
会員紹介	9
今後の活動計画	10
編集後記	10



■国土交通省 Project PLATEAU 2023 年度ユースケース開発「XR 技術を活用した住民参加型まちづくり」関連シンポジウム■ XR 技術を活用したデジタルエリアマネジメント —広島市都心部の未来を創造する—

日時：2023 年 6 月 19 日(月) 16:00~18:00
 場所：いいオフィス広島 by LIG
 主催：エリアプラットフォーム・カミハチキテル
 共催：株式会社ホロラボ／株式会社日建設計
 ／株式会社日建設計総合研究所
 後援：日本都市計画学会中国四国支部
 日本建築学会中国支部都市計画委員会
 日本計画行政学会中国支部
 参加者：リアル+オンライン 合計 約延 220 人

はじめに

平日月曜日の夕方の開催であったが、リアルとオンライン合わせて 200 名を超える参加者があった。まず冒頭エリアプラットフォーム・カミハチキテル代表の若狭より開会の挨拶があり、今回の趣旨等が説明された。



シンポジウム

広島市都心部の現状の共有から始まった。広島市 前様より広島都心活性化の推進について、これまでの取り組み、開発の現状、支援策の紹介、エリアマネジメント団体支援などの情報提供がなされた。エリアプラットフォームカミハチキテル 今田から同団体の設立経緯や社会実験などの取り組み、同団体がまとめた紙屋町八丁堀エリアの将来ビジョン『カミハチミライデザイン ver. 0.5』について情報提供がなされた。

国土交通省 内山様より今回のメインコンテンツである Project PLATEAU (プラトー) の概要などの情報提供がなされた。色々な情報が繋がって新しい価値を生み出すようなものになってほしいという思いでつけられた名前であることなども紹介された。Project PLATEAU は都市デジタルツインの社会実装を目指し、国土交通省が地方公共団体、民間企業、地域コミュニティなどと連携して進めているプロジェクトで 4 年目を迎えた。3D 都市モデルのオープンな提供は進んできたため、今後はユースケースのさらなる社会実装を目指していることなどが共有された。

復建調査設計株式会社 宇山様からは広島駅前におけ

る PLATEAU を活用したエリアマネジメントの取り組みが共有された。主には地域情報プラットフォームの構築、活動の可視化、合意形成の効率化を目指し取り組まれていた。今後社会実装に向けてさらに開発を進めていかれる予定とのことであった。

ホロラボ 伊藤武仙様と日建設計 亀井様からは会社概要と今年度カミハチキテルと行う取り組みについて紹介された。カミハチキテルと共同で紙屋町・八丁堀エリアを対象としたワークショップを行い、その成果をランジットパーク化などビジョン実現に向けた合意形成に活かしていくことが紹介された。

パネルディスカッション

パネルディスカッションには、引き続き今田、内山様、伊藤武仙様、新たに広島修道大学 国際コミュニティ学部三浦教授と日建設計総合研究所 伊藤慎兵様がパネラーとして登壇され、ファシリテーターをホロラボ 加茂様が務めて進められた。

まずは三浦教授より、最近のご研究内容に基づく PLATEAU に期待することを情報提供され、そこからパネルディスカッションが進んでいった。パネルディスカッションでは、市民参画まちづくりにおける XR 技術の取り組みへの期待と不安、広島でのまちづくりでデジタル技術をどう活かせるのか、広島でのプロジェクトへの期待などをテーマにパネルトークが繰り広げられた。若い人が WS に参加するハードルを下げることができるのではないか、プロセスと結果にズレが少なく、解像度が高い議論ができるのではないか、共通言語に落としこみやすく、これまでのプロセスでは得ることができなかった結論が得られるのではないかなど、これまで WS の主催者側が一度は感じたことのある課題を打破できる期待が高まるディスカッションが続いた。

その後、パネラーと傍聴者との活発な質疑応答も交わされ、さらに理解を深めることができた。



おわりに

シンポジウム後は、3D 都市モデルを用いた AR 体験などのブース展示に多くの人が集っていた。

リアル会場は熱気に満ちていて、シンポジウムが進むにつれ、その熱気は期待に変わっていった。盛況かつ大きな期待のもと、広島での PLATEAU ユースケース開発プロジェクトがキックオフされた。

(文責：木原一郎)

■第 1 回都市計画サロン■

都市のコバコ 都市機能むかし話

日時：2023 年 7 月 20 日(木) 19:00~21:00

場所：合人社ウエンディひと・まちプラザ3階 フリースペース奥 会議室A、オンライン：Zoom

講師：松田 智仁(元広島市職員)

■「都市のコバコ」とは

コロナ禍を境に、都市計画業界で話をする機会がなくなっていたところ、コロナ禍も終結したため、機会を作って順に話を伺い、懇親を深めるために始めた試み。2~3か月に1回程度開催する予定。



■今回のテーマ「都市機能むかし話」とは

コンパクトシティ誘導施策や都市再生のシナリオを描く場面で必須となる、都市機能の配置・誘導に関連して、1997年当時の都市機能評価・分析手法や当時関心を寄せた都市機能分野について振り返る。

■中枢都市圏が備えるべき都市機能(国土庁・国土審議会 会計画部会「計画部会調査検討報告」(平成8年(1996)12月)より)

(1) 広域国際交流圏の拠点としての中枢拠点都市圏

国土庁及び国土審議会会計画部会は、21世紀の望ましい国土構造の基礎を築くための戦略的施策の一つに「広域国際交流圏」の形成を掲げ、広島等の地方中枢都市の都市圏を広域国際交流圏の拠点、高次都市機能の集積の拠点としての「中枢拠点都市圏」に位置づけた。

(2) 広域国際交流圏が備えるべき機能

広域国際交流圏は、中枢拠点都市圏またはその連携を核として地域ブロックを超える広がりを持つ程度の圏域を基本とする世界的な交流機能を有する圏域であり、具体的には以下の機能等を備えるものとされている。

- ① 国際業務や国際的な会義、見本市、宿泊・滞在などの経済・都市機能
- ② 国際的な学術、研究開発や教育・研修機能
- ③ 国際的な芸術、文化、スポーツ機能
- ④ 外客を対象とする観光レクリエーション機能
- ⑤ 国際空港、国際港湾などの国際交通機能、及び全国各地域とこれらを結ぶ高速鉄道、高規格幹線道路等、さらに、高度な情報通信基盤

(3) 広域国際交流圏の拠点としての中枢拠点都市圏が備えるべき都市機能

中枢拠点都市圏は、地方ブロックレベルにおける地

域の自立的発展の拠点としての役割を果たし、中枢管理、研究開発、情報、国際交流等の高次都市機能の充実に必要がある。

特に、国際交流機能については、広域国際交流圏の拠点としての機能を果たすことが求められ、中枢拠点都市圏においては、以下のような国際交流機能等の強化を図るものとされている。

- ① 国際交流基盤(国際交流機能)
 - ◇ 質の高い国際空港、港湾、高規格幹線道路網やこれらへのアクセスのための道路・公共交通機関、国際会議場・展示場、情報通信基盤等の整備
 - ◇ 国際会議、イベントの誘致やこれらを企画する組織、人材の育成
- ② 高次都市機能の受け皿(市街地の整備)
 - ◇ 良好な拠点市街地の整備
 - ◇ 既存のストックを有効活用した中心市街地の再整備
- ③ 産業発展の先導(研究開発機能)
 - ◇ 大学等を核とした知的な蓄積を活用した研究学園都市、リサーチパーク等の整備
 - ◇ 研究開発機能を担う人材の育成・確保を図るための大学、研究開発機関等の充実や地域企業との連携強化

■都市機能の放出性

都市機能種類別に、下式によって求められる中心性指数から、それぞれの(外部地域を支援する力の強弱)を把握することとした。(松田提案)

$$Z_{ij} = \frac{e_{ij}}{p_i (E_j / P)}$$

Z_{ij} : i都市における j機能の中心性指数

e_{ij} : i都市における j機能の従業者数

E_j : 全国における j機能の従業者数

P_i : i都市の人口

P : 全国人口

※ $p_i (E_j / P)$ は、全国における人口1人当たりの j機能の従業者数を基準として、i都市における j機能の必要従業者数を求めたものであり、 e_{ij} は現実の従業者数である。したがって、 $Z_{ij} > 1$ であれば、i都市は j機能について中心性を持ち、すなわち外部地域を支援している。

IV HIROSHIMA が目指すべき世界都市機能

1 世界都市機能

世界都市とは、一般には国際政治、国際経済、世界的レベルの文化活動の一翼を担い、これらに関わる人々と基盤の整った都市であり、ニューヨーク、ロンドン、パリ、ブリュッセル、ワシントン、ジュネーブ、ウィーン、東京など極めて一部の都市に限定される。

世界都市機能の概念としては、国際政治の管理中枢機能、国際経済の管理中枢機能、国際文化・情報交流の管

理的中枢機能があり、世界都市機能は、これを支える人々の集合体としての社会組織であるとされる。

今一つの考え方として「国際交流機能」という概念があるが、これは地方における経済文化圏形成を図る上で、世界とのチャンネルを強化していくための機能という考え方であり、高次都市機能に包含される機能であると捉えることができる。ここでは、世界に影響力を持つ機能という極めて高度な限定された機能として世界都市機能を捉える。

※ 奥田義雄(中央大学教授)によると、世界都市は「現代世界における国家の枠組みが総体的に弱まり、先進諸国の巨大都市が地球的な規模における政治・経済・文化(情報)のシステムとそのネットワークの多極的な結節点の一つとして、世界的な管理中枢機能を果たすようになったとき、これを世界都市という」と定義している。

※ 世界都市の具体的な都市像は、次の4つを示している。

- ①国際的に交流する人々の集合体と、国際的な交流の場としての諸施設・設備をはじめ市民的生活基盤としてそれを運営・保守管理する人々の市民集合体
 - ②政治的活動において世界的な国際政治の管理中枢機能を担っている都市
 - ③経済的活動において世界的な国際経済の管理中枢的機能を担っている都市
 - ④文化的活動において世界的な国際文化・情報交流の管理中枢的機能を担っている都市
- (「世界都市の研究」(NIRA 政策研究/1993. VI) L. 6. NO. 5) より抜粋)

2 世界都市機能の整備方向

広島市は、「世界初の被爆都市」という悲惨な歴史上の事実を基として、積極的に世界平和をアピールしてきており、これは世界に対する情報発信力を持ち得ているという意味において、「国際文化・情報交流の管理中枢機能」の一部の機能を有している。

また、アジア競技大会や国際アニメーション・フェスティバルに代表されるように、文化・スポーツの面でも一定の役割を担ってきている。このほか、都市圏内には世界的な企業も多いことからグローバルな産業情報の発信性も、世界都市機能の資源として位置づけることも可能である。

3 世界都市機能の整備

(1) 「つくりだす平和」のリーダー都市

「核廃絶」「軍縮」「放射線被曝者治療」に向けた情報発信や関係者の交流の場を被爆地広島でより一層強力に展開していくための、組織・施設・会議機能の強化を図る必要がある、これまでに提案されている次のようなアイデアを基に、その具体化を検討していく必要がある。

…地球市民による国際平和創造拠点…被爆建物を積極的に活用したい。

(2) 芸術文化情報発信の拡大

世界の人々が平和を共有し、生きる勇気と希望を分かち合えるように平和への思いを文学映画、音楽、美術、演劇など芸術文化の形で継承していくことが重要であり、世界の人々に平和の感動を呼び起こすような活動の推進・支援が必要である。…平和文化の振興

また、「つくりだす平和」活動の基盤には、人間対人間のつながりや人間性豊かな人材の育成・交流が重要である。…国際人教育の充実

特に、国際アニメーションフェスティバルの実績などを基に、映像文化の交流拡大を図ると共に、広島交響楽団や現代美術館などの文化拠点機能を核として、国際文化交流のチャンネルを拡大していくことが考えられる。また、アジア競技大会での交流実績を活かした国際的なスポーツ交流を展開していくことが求められる。…アニメーション文化の振興 ゲームオリンピック開催

(3) 産業情報の発信

出島地区で計画中的のコンベンション施設等を舞台として、広島市及び周辺地域が有する産業情報や、バイオ・食糧・環境技術など将来にわたり蓄積していく技術・情報に関する国際展示会の開催を推進していくことを世界都市機能整備上の課題として捉えていく必要がある。…SDGs 時代の産業構築の展開

(4) 世界都市機能充実のための社会環境・都市基盤などの整備

「つくりだす平和」を核とした世界都市機能を創生していくためには、通訳、観光、情報などの関連サービスや交通、通信、交流施設などの交流基盤を含む高次都市機能としての国際交流機能の整備が必要であるとともに、ホスピタリティの向上、人材の育成など基礎となる各種機能・基盤の整備が必要である。…外国人も暮らしやすい街 水都文化の振興

■所感

近年都市の機能について踏まえる機会がなかった中、平成8年当時の目指していた都市の姿を鑑みることにより、今のマイルストーンを確認する機会になり、感慨深く感じた。



(文責: 福馬晶子)

■第 2・3 回都市計画サロン■**(日本建築学会) 中国支部都市計画系研究室公開
研究交流会**

日時：2023 年 9 月 2 日(土) 15:00~17:00 (第 2 回)

2023 年 9 月 30 日(土) 15:00~17:00 (第 3 回)

主催：(一社) 日本建築学会 中国支部

共催：(公社) 日本都市計画学会 中国四国支部

はじめに

第 2 回の冒頭で、日本建築学会中国支部都市計画委員会の宋俊煥委員長(山口大学)より、趣旨説明があった。本交流会は、前年度(2023 年 3 月)の日本建築学会中国支部研究発表会で若手優秀発賞(都市計画部門)を受賞された皆さんに講演いただき、時間をかけて詳しくお聞きした上で、議論を深めようという趣旨で開催しているもので、一昨年度より実施している。建築分野のみならず、広く都市計画分野の皆様を開いた会にしようということを目指し、日本都市計画学会中国四国支部の「都市計画サロン」共催という形としている。昨年度の若手優秀発表賞受賞者 5 名に加え、委員会推薦 1 名を追加した 6 名を、2 回に分けて開催することとし、各講演 15 分程度の議論が行われた。

第 2 回：9 月 2 日(オンライン)**講演 1「広島都心部の屋外空間を対象とした夏季熱環境改善策導入のポテンシャル評価」**

忽那直哉(広島大学大学院先進理工系科学研究科)

CFD シミュレーションにより、広島都心部の屋外空間の緑化による、夏季熱環境改善効果の予測を行った結果について説明がなされた。講演後、シミュレーションの中での日射の扱い方等について議論がなされた。

講演 2「アメリカ・ワシントン DC における新型コロナウィルス前後のパークレットプログラムの変化に関する調査報告」

十亀維晶(広島大学大学院先進理工系科学研究科)

【体調不良のため、指導教員の田中貴宏が代理発表】

COVID-19 後、米国ワシントン DC で、新たに導入された「ストーリータリー(飲食店に利用に特化した形のパークレット)」プログラムについて説明がなされた。講演後、日米の設置主体の違い等について議論がなされた。

講演 3「都市機能別施設数およびその多様性と滞在人口の関連に関する研究」

山本友樹(広島大学大学院先進理工系科学研究科)

【体調不良のため、指導教員の田中貴宏が代理発表】

人流データを用いて、人々の昼間の滞在が多いエリアを把握し、都市機能別施設数やその多様性といった観点から、その特性分析を行った結果について説明がなされた。講演後、施設の組み合わせの効果等について議論がなされた。

第 3 回：9 月 30 日(場所：port.cloud(オンライン併用))**講演 4「参加型社会住宅 People's Plan 移住地の住環境」**

青木悠真(山口大学大学院創成科学研究科)

フィリピン共和国のインフォーマル居住家族 10.4 万世帯を対象とした、コーポラティブ方式での移住を行う参加型社会住宅政策「People's Plan」について、その目標の一つとされている生計に着目し、移住先住宅地の生計空間の現状と課題を明らかにした結果の説明がなされた。

講演 5「ウォーカブルな街路空間デザイン指標を考慮した経路選択モデルの作成」

西村純平(株式会社建設技術研究所)(当時：広島大学)

広島都心部を対象に、GPS による人流データを用いて、徒歩の経路選択モデルを作成した成果について説明がなされた。講演後、経路選択モデルの精度や、作成した経路選択モデルの社会実装等について議論がなされた。

講演 6「地方中都市における商業施設の利用圏に関する研究」

重松大輝(広島大学大学院先進理工系科学研究科)

【体調不良のため、指導教員の田中貴宏が代理発表】

広島県呉市を対象に、GPS による人流データを用いて、商業施設(スーパーマーケット)の日常利用圏を分析した結果について説明がなされた。講演後、対象地選定の意図や、鉄道駅の影響等について議論がなされた。

おわりに

第 3 回の終わりに、日本建築学会中国支部都市計画委員会の小林剛士副委員長(山口大学)より、会の総括が行われた。次年度の参加研究室拡大についても提案がなされた。

雑感

第 3 回は、「中国支部都市計画系研究室公開研究交流会」初の対面開催で、終了後には懇親会も開催された。オンラインに比べ、伝わる情報量の多さを、改めて実感すると同時に、この 3 年間で失ったものの大きさも感じた。いずれにしても、ようやく COVID-19 以前の支部活動に戻りつつあり、支部の事務局を預かる身としては安堵もした。



第 3 回終了後の集合写真(撮影：小林剛士)

(文責 田中貴宏)

■第 4 回都市計画サロン■

Peter Nijkamp (ペーター・ナイカンプ) 氏
講演会

『都市計画における新たなチャレンジ』
“Contemporary challenges on urban planning”

日時：2023 年 10 月 7 日(土) 13:30~16:00

場所：KIRO 広島 3F Poolside

(広島市中区三川町 3-21)

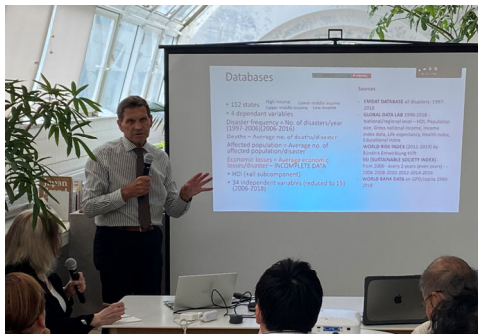
主催：(公社) 日本都市計画学会 中国四国支部、
安田女子大学、The Regional Science
Academy

概要

Peter Nijkamp (ペーター・ナイカンプ) 氏と共同研究者である Karima Kourtit (カリマ・コウティト) 氏の講演会を開催した。両氏は、日本地域学会年次大会(10/8~9)に合わせて来日され、長年ナイカンプ氏と共同研究をされてきた安田女子大学の João Romão (ジョアオ・ロマオ) 准教授の招きによる広島訪問に合わせ、都市計画サロンとして企画した。英語による講演(日本語通訳付き)であり、現地とオンラインの併用で実施した。以下、講演内容(紙面の都合により概略のみ)を紹介する。

Peter Nijkamp (ペーター・ナイカンプ) 氏講演

Blessing in Disguise: How do Cities Recover from Disasters?



Peter Nijkamp 氏

オランダでは 1421 年にエリザベス水害と呼ばれる水害があり、オランダの低い土地は全て埋もれてしまった。しかし、その 100 年後、オランダはヨーロッパの中でも有数の経済的にも政治的にも強い力を得た。Blessing in Disguise (災い転じて福となす) という言葉があるが、災害等が起こった時に、前よりも良いものにする、更に力をつけることを考えなければいけない。

災害等のショックを受けた時にどう対応するか。地域にはその対応性(レジリエンス)が必要だが、更に一歩先、生活や経済を強くしていく、マイナス要素をプラスにして、より良いものにしていくための復興作戦を進める上では、プロジリエンス(PROSILIENCE)という要素が必要になってくる。立ち向かって跳ね返るだけでなく、もう一歩踏み込んで、より良いものにしていくことが重要である。

そのような前向きな考え方をどう測るかというときに、HDI(The HUMAN DEVELOPMENT INDEX、人間開発指数)がある。経済的な復興、裕福さだけでなく、ウェルビーイングの概念を用いて、広い範囲で生活が良くなったことを測ることが必要である。現在、152 の国のデータを使い、長期的にどのように都市が良くなっていったか、都市間の比較をしている。様々なデータから、災害等が起こった時には、そこにチャンスもあることが分かった。一番重要なことは、何か起こった際に、同じところに戻るのではなくさらに進むこと。災害は必ず起きることを前提として、すぐ対応するための準備をする。準備にはかなりの資金が必要だが、その点で日本は公的投資があり、世界的にも良い例になるだろう。

Karima Kourtit (カリマ・コウティト) 氏講演

Energy transition and digital twins in modern cities



Karima Kourtit 氏

今日はロッテルダムを対象として行っている都市のデジタルツインの取組をご紹介します。毎日の生活、産業活動でエネルギーが使われているが、限りある資源をどう節約していくか、複雑な都市のシステムの中で何が優先されるべきかなど、エネルギー消費の在り方を考える必要がある。

また、地域で行動していくためには、市民がエネルギー利用について考え、選択肢を持つことが必要であり、そのためにロッテルダムではエネルギーマッピングを行っている。多くのデータを集め、多くの人が理解できるよう分かりやすく情報提供するツールを作り、リアリティのあるデータを元に市民が行動できるようサポートしている。

国が決めたこと、市が決めたこと、自治体が決めたことは透明化しておくべきであり、全ての情報をバランスよく提供していく。上から指示しても誰も言うことを聞かないが、選択肢を与えた上で、コミュニケーションの場があると前に進んでいく。

街のどこに日陰ができるか、ヒートアイランドはどこで起きているか、歩行者天国にしたらどうなるか、駐車場はどこに配置すべきか、地下の状況はどうなっているかなど、街の情報を集め、デジタルツインとすることにより、デジタル乗でシミュレーションを行うことができ、その後のシナリオが見えてくる。世界の街はそれぞれ違うので、それぞれ違うシナリオが見えてくるだろう。

(文責 吉原俊朗)

■2023 年度 支部地域活動助成事業報告■ 四国のまちづくりに関する情報交換会&見学会

日時：2023 年 9 月 1 日 (金) 13:00~17:15

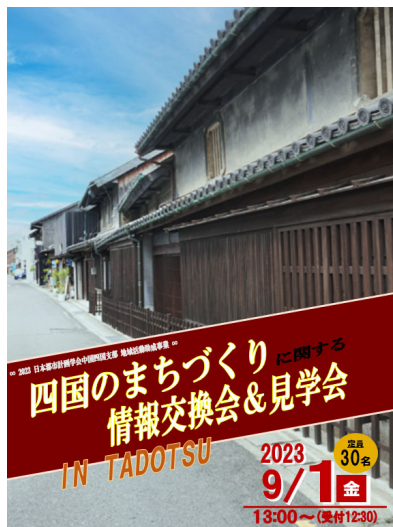
場所：多度津町役場

プログラム：

第 1 部：情報交換会 (13:30~15:30)

第 2 部：見学会 (15:40~17:25)

参加者：36 名



2023 年度地域活動助成事業として、「四国のまちづくりに関する情報交換会&見学会」を開催した。今回は「地方小都市における歴史まちづくりを考える」をテーマに香川県仲多度郡多度津町で行った。第 1 部の情報交換会では 5 件の話題提供とトークセッションが行われ、第 2 部の見学会では、多度津町役場職員の松下氏らが案内人となり、重要伝統的建造物群保存地区候補エリアを中心に見て歩き説明頂いた。

<情報交換会> 13:00~15:15

(1) 「歴史まちづくり及び景観法について」

(四国地方整備局建政部 都市・住宅整備課 関口智彦 氏)



関口氏から、歴史まちづくりの系譜や法のしくみ、支援措置についての紹介がなされた。景観行政に取り組む団体数は、749 団体、景観計画策定団体は 646 団体 (令和 4 年 3 月 31 日時点) であり、全国の市区町村のうち約 3 分の 1 に留まっている現状である。文化財指定されていない歴史的建造物は、維持管理に多くの費用が掛かり、所有者の高齢化等を背景に滅失が進み良好な歴史的町なみが失われつつある。そこで、歴史まちづくり法が

制定され、市町村が策定する「歴史的風致維持向上計画」を国が認定し、重点的な支援措置が可能となることが紹介された。既に認定された都市数は、全国で 90 都市 (令和 5 年 3 月 30 日時点) あり、四国地方は認定件数が少なく香川県ではまだ認定されていないため、補助を受けながら活動できるこの事業を積極的に活用してほしいとのコメントがあった。認定都市には、寺社や城下町が半数以上を占めるが、産業都市や農林漁業集落、宿場町など多様な成り立ちの都市があり、地域のアイデンティティの確立や地域行事の復活、歴史的建造物の滅失を最小限に留められる等、認定を受けることの効果が挙げられた。

(2) 「重要伝統的建造物群保存地区選定に向けて歩む多度津町について」

(多度津町教育委員会 生涯学習課

松下直樹 氏)

「多度津町のまちづくりと課題」

(多度津町政策観光課 高嶋晃史 氏)



多度津町では、重要伝統的建造物群保存地区選定に向けて取り組んでおり、職員の松下氏と高嶋氏から、多度津町の伝統的な町並みの紹介やまちづくりに関する取組事例や課題について説明された。松下氏からは、古代や中世の歴史に遡り、港町・商家街として発展した多度津町のこれまでの歴史について紹介された。また、町の伝統的な町並みを残し継承するため、町並みの特徴や価値を明らかにし、その保存と活用の施策を検討するため文化庁補助事業を活用して調査を実施している。調査の結果、多度津町本町の伝統的町並みは高い文化財的価値を有し、重伝地区になる見込みがあることから現在、重伝建選定に向けた取組を実施しているとの報告があった。高嶋氏からは、町の総合計画の基本構想として「ひと・暮らし・歴史が共生するまちづくり」を掲げており、現在取り組んでいるまちづくり事業の取組みが紹介された。例えば、多度津町のファンを増やす目的として町外の方も利用でき、コミュニティ通貨として利用できるスマートフォンアプリ「まちのこいん『どつつ』」の導入。また、まちの賑わいづくりや認知度向上を目的として民間企業や行政職員有志で組織化された「多度津町まねきねこ課」を設立し、官民協働でタウンプロモーションを進める等の取組について説明があった。

(3) 「多度津町本通の交通量調査 ～一方通行と対面通行の比較に向けて～」

(香川大学 創造工学部 玉置哲也研究室)



香川大学玉置研究室からは、多度津町本通の交通量に関する報告がなされた。多度津町本通では現在一方通行規制を行っている。一方通行規制には交通を円滑化する等のメリットがある。しかしそれによって車の平均速度が上昇することも考えられるため、歩行者の快適性や事故リスクの観点から一方通行がいいのか、対面通行がいいのか不明な点も多く残されている。本研究はその点に着目し、一方通行規制を行っている多度津町本通と、対面通行を行っている宇多津町古街エリアを比較することで、両者の特性の違いを明らかにしようとするものである。具体的には、特定の時間帯に対象道路の通過交通の状況をビデオ撮影し、画像認識における機械学習を用いて、歩行者と自動車の物体検出・追跡を行った上、歩行者および自動車の数の把握、速度の算出などを行っている。今回の報告では、宇多津町古街エリアの分析のみであったが、自動車交通においては、道幅の広いところですれ違うよう、譲り合いの行動が観察されている。

(4) 「重伝建から歴史まちづくり法への歩みについて」

(岐阜県都市建築部 都市公園・交通局 舟久保敏 氏、建築家 多田善昭 氏)



まず、舟久保氏から歴史まちづくり法の制定背景が語られた。平成 16 年に施行された景観法は、決めたルールをいかに守ってもらうか規制するための法律であったが、地域が主体的に取り組む計画に対して、これを後押しし応援（サポート）できる法律を作りたいとの背景から歴史まちづくり法が制定された。歴史ある文化財は、現状のまま保存することも大切であるが、将来に継承することも重要である。また、多田氏から

は、それぞれの町にしかないもの（歴史・文化等）を磨き上げることが重要であり、最近では地域特有の体験型の観光も人気があり、地域の歴史や文化を知り体験することは、地域が存続するための 1 つの戦略として重要ではないかとの意見が出された。もちろん、地域外の人から地域の魅力を評価されることが一番分かりやすいが、改めて自分達も見直し再認識することも大切であるとコメントされた。

<まちづくり見学会> 15:30~17:15



見学会では、情報交換会で紹介された文化的価値の高い本通地区等、保存地区の候補エリアについて多度津町役場職員の松下氏らから案内頂いた。桃陵公園展望台から、本通り地区に向けて石川金物店倉庫や小國家住宅、おのみち屋等を見て歩き、最後に町文化財に指定された旧豪商の邸宅「旧合田家住宅（合田邸）」を見学した。その他、廃業銭湯の清水温泉は現在、湯船で飲食を楽しめるアートカフェとして営業されており、SNS 等を通じて多くの若者が利用しているようだ。また、銭湯近くにある歴史ある建屋はリノベーションにより一棟貸のゲストハウスとして利用され、レトロな暮らしを体験できることが魅力の 1 つである。案内頂いた多度津町職員の方からは、「歴史的建造物は保存することも大事だが、貴重な資源を維持しつつ活用することも重要である」との熱い想いを聴くことができた。多度津町のまちづくりは、単に歴史や文化、建造物を保存するだけでなく、その時代に合わせて活用されている。このように、若者から高齢者と幅広い世代や、地域内外の多くの人に触れてもらう工夫が凝らされたまちづくりが多度津町の魅力の 1 つではないだろうか。

(文責：岸本由梨枝・高塚創)

■ 会員紹介 ■**谷川 大輔 (たにかわ だいすけ)**

近畿大学工学部建築学科 准教授

■ 略歴

1973 年生まれ/東京都港区出身/
1992 年東京都立日比谷高等学校/
1997 年東京理科大学工学部卒/2004 年東京工業大学大学院満期退学/2006 年東京理科大学工学部助教/2012 年近畿大学工学部建築学科講師/2017 年同大学准教授/2022-2023 年カタルーニャ工科大学 ETSAV (スペイン・バルセロナ) 研究員/2023 年-現職

**■ 自己紹介**

私は、東京から 2012 年に東広島に移住して参りました。東広島での生活も今年で 11 年目となります。東京では長らく集合住宅に暮らしておりましたが、2012 年から 2021 年までの 9 年間は、山陽本線の西高屋駅が最寄りの近畿大学工学部の近くにある『東広島ニュータウン (高美が丘)』の戸建て住宅に賃貸で住んでおりました。この間に、東広島市福富町下竹仁 (中山間地域) にある空き家となっていた古民家を購入して、学生と共に改修を続けてきました。昨年度、東広島生活 10 年目にあたる 2022 年 4 月から 2023 年 3 月までは、在外研究でスペイン・バルセロナに滞在しておりましたが、本年 2023 年 4 月からは帰国し、この改修を続けてきた古民家『星降るテラス』に暮らしております。現在は、まだまだ生活が整っていませんが、豊かな田園風景の中での生活を楽しんでいます。東京やバルセロナでは『都市』、東広島では『自然』と共に暮らすことの魅力について考えているのだと思っています。よろしくお願ひ致します。

■ 取組紹介

現在は私どもの研究室では主に、東広島市と近畿大学工学部が連携して地域課題に取り組む、近畿大学版 (広島大学版があります。) Town & Gown (タウン・アンド・ガウン) 構想の一環で、『福富町における廃校小学校の空間的価値を活かしたリノベーションによる循環経済の具現化』について研究に取り組んでいます。この取り組みは主に、私どもが古民家再生を行ってきた東広島市福富町にある廃校となった旧竹仁小学校のリノベーション及び利活用に関する研究です。またこの取り組みは、福富町地域にあり、30 年前からゴルフ場開発用地として取得され、開発されずに放置されてきた『ANA の森』の整備も含んでいます。『森』の再生の活動を通して、廃校小学校の『森の小学校』としての再生を目指しています。またこのプロジェクトは昨年度より、東広島市とマツダと博報堂が包括連携協定を結び、研究・事業企画プラットフォーム「生活デザイン・工学研究所」を設立して活動を進めており、私どもの研究室は研究協力として参加しております。廃校小学校のリノベーションは 2 年半後、2026 年 4 月のオープンを目指しています。

田中 健三 (たなか けんぞう)

中電技術コンサルタント株式会社

経営企画部

イノベーションプロジェクト 主査

**■ 略歴**

1988 年生まれ/山口県山口市出身/2010 年広島大学工学部第四類 (建設系) 卒業/2011 年中電技術コンサルタント株式会社に入社 建築部に配属/2021 年より現部署に配属

■ 自己紹介

私は山口県の県庁所在地である山口市に生まれ、大学進学の際に広島県へ移り住みました。高校生の頃に、両親が家を建て、それを身近で見ていたことも影響して、建築に興味を持ち広島大学では建築学を専攻しました。大学在学中は、まちづくり分野にも興味を持ち、元々、地元へ愛着があったことから、卒業設計では山口市の中心市街地活性化をテーマに取り組みました。

大学卒業後は、現在所属する中電技術コンサルタント株式会社に入社、建築部に配属され、建築の意匠設計の業務に従事してきました。一方で、建築単体では解決できない地域の課題に触れる機会も多くあったことから、それらの解決に資する業務にも従事したいという想いが芽生え、建築設計だけでなく、まちづくり関連の業務にも取り組むようになりました。

現在は、主に地域創生をテーマに新事業創出に取り組む部署に所属し、都市計画・まちづくり分野の業務を中心に従事しています。

■ 取組紹介

廿日市市宮島口地区において、地元事業者が中心となったまちづくり組織と協働し、エリアマネジメント実践に向けて取り組んでいます。歩行者利便増進道路 (ほこみち) 制度による歩行空間の活用や、空き店舗をリノベーションし、情報発信・チャレンジスペースとして地域で運営する施設、鉄道駅・フェリーターミナルに隣接して整備される広場空間の有効活用など、幅広い取り組みを地元住民・事業者に加え、民間企業や学生と協働しながら活動しています。

その他にも、都市公園のサービス向上・利用促進を契機に地域の価値・魅力を高めていくための取り組みとして、Park-PFI 等による官民連携体制の構築を目指す業務についても取り組んでいます。ここでは、これまで培ってきた建築設計のノウハウを活かす機会も多く、都市計画分野と建築分野の関係性がより親密なものになっており、近年は複数分野の共創が社会からより一層求められているように感じています。

今後も、本学会での活動を通じた多くの方との交流を通じて、都市計画分野・建築分野いずれの知見も高めていきながら、地域課題の解決に幅広い視点で取り組むことのできる技術者を目指していきたいと考えています。

■今後の活動計画■

■講演会「徳山駅周辺でのエリアマネジメントの展開 4」

(2023 年度支部地域活動助成事業)

日時: 2023 年 11 月 18 日 (土) 13:00 ~ (12:30 開場)

会場: 周南市役所 1 階 多目的室 (周南市岐山通 1-1)

プログラム:

講演会「まちのにぎわいを『民』のチカラでつむぐ」

講師: 原田修司氏

(周南市 都市整備部都市政策課)

組谷明豊氏 (周南ツナガルコンソーシアム)

意見交換「『民』のチカラとは、何か？」

取り組みの成果と今後の展望」

司会: 目山直樹 (徳山工業高等専門学校)

参加申込先/徳山高専テクノ・アカデミア事務局

E-mail: academia@tokuyama.ac.jp

※詳細は、支部 HP をご覧ください。

■その他

その他、以下の催しを予定しております。詳細が決まり次第、支部 HP に掲載いたします。

- ・ 第 1 回 都市計画研究会: 2023 年 12 月開催予定
(テーマ: デジタル技術と都市計画③)
- ・ 都市計画特別講演会: 2024 年 1 月開催予定
(テーマ: 再生が進む広島市都心部)
- ・ 第 2 回 都市計画研究会: 2024 年 2~3 月頃開催予定
(テーマ: デジタル技術と都市計画④)
- ・ 都市計画シンポジウム: 2024 年 2~3 月頃開催予定
(小さな拠点づくりの運営を考える会)

(事務局 田中貴宏)

■編集後記■

この度初めてニュースレターの編集を担当させていただきました。復建調査設計の田中健太と申します。今回会員紹介には中電技術コンサルタントの田中健三さんのご紹介を掲載させていただいておりますが別の田中です。これ程お名前の似た方が近くで同じようなお仕事をされていることに大変驚きながら編集後記を書かせていただいております。

さて、今回のニュースレターは第 60 号です。昨年度には支部設立 20 周年を迎え、記念シンポジウムを開催し当支部も着々と歴史を築いております。

中国四国支部は大学のみでなく、行政、民間企業の会員も多く、様々な立場の方が当学会で活躍されていることが特徴的だという話を伺っております。今年度は計 6 回の都市計画サロンを予定する等、活発に活動が行われています。

私は現所属企業への入社を契機にどのような流れか総務委員会と企画・研究委員会の委員を務めさせていただくこととなりましたが、業務以外の場で都市計画について研究したり、議論する場を持って今は大変嬉しく思っています。

ようやくコロナも落ち着き、当学会の活動も対面での実施が増えてまいりました。イベントの実施や委員会の後には大抵居酒屋に流れていくわけですが、そこでは仕事ほど緊張感(責任感?)なく諸先輩方から都市計画のいろはを学ぶことができます。このような環境があるのも諸先輩方のご尽力によるところと感謝しているところです。

一方で、前号の編集後記にも記されておりましたが、そろそろ各種委員の引き継ぎについても考えていけないといけないかと感じています。また、学会員の中からは若手でフランクに意見交換ができる場が欲しいという声も聞いています。

若手の皆様に向けて述べさせていただくと、是非各種委員会にご参加いただければと思います。日々のお仕事、研究等でお忙しいかと思いますが、なにか良い発見や出会いがあることと思います。また、「若手でフランクに意見交換ができる場」というのも私もあれば良いなと思っています。皆様と一緒に検討していければなとも思っています。以上の 2 点ご一考いただけると幸いです。

最後に、本年度の下半期にも各種催しが予定されておりますのでご興味のある催しには是非ご出席ください。

(文責: 田中健太)

編集委員: 吉原俊朗 (編集長)、織田恭平、北本拓也、白石レイ、田中健太、田辺博樹、福馬晶子、松田智仁、山下和也

※当編集委員は、総務委員会の要請により参加したメンバーです。ご参加いただける方は、編集長にお申し出下さい。